

日常に対する祈り

廣安知之

奨励者紹介〔ひろやす・ともゆき〕

同志社大学副学長・学長室長

同志社大学生命医科学部教授

主わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は去って行き、もはや海もなくなった。更にわたしは、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下って来るのを見た。そのとき、わたしは玉座から語りかける大きな声を聞いた。「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去ったからである。」

すると、玉座に座っておられる方が、「見よ、わたしは万物を新しくする」と言い、また、「書き記せ。これらの言葉は信頼でき、また真実である」と言われた。

(ヨハネの黙示録 21 章 1—5 節)

チャペル・アワーでお話しする機会をいただきました、生命医科学部の廣安知之です。今年の4月から副学長を務めています。副学長としての仕事は多岐にわたり、庶務、企画、渉外、情報部門、そして附属学校などを担当しています。簡単に説明するのは難しいですが、大学の様々な業務に関わっています。私自身の研究についても少しお話しします。私の研究は、コンピュータがデータを効率よく、賢く、そして迅速に処理する方法に関するものです。最近の言葉で言うなら「AI(人工知能)」に関連する研究と言えるでしょう。特に、ヒトの生体情報を扱い、ヒトの Well-being に貢献する技術に興味を持っています。同志社大学の教育理念には「キリスト教主義、国際主義、自由主義」がありますが、今日は特に「キリスト教主義」について考えてみたいと思います。新島襄は、徳育の基本を「キリスト教」に置きましたが、これは「キリスト教」を信じるかどうかにかかわらず、その教えを真剣に考えることから始まるものだと思います。2021年度の同志社スピリット・ウィークでは、「クララは電気羊の夢を見るか?」というテーマで、聖書の視点からAIについて考える試みを行いました。もし興味があれば、ぜひご覧ください。私はキリスト教徒ではありませんが、今日は皆さんと一緒に、「祈り」について考える時間を共有したいと思います。

さて、4月が始まって約3週間、皆さんはいかがお過ごしでしょうか。新しい生活や勉強に少し慣れてきましたか。私も大学での仕事に追われている毎日です。4月はいつも、新しい学生への対応や新しい仕事が一気に始まり、それまでの仕事と重なって、まさにアップアップしています。今年は副学長の仕事も加わり、ますます大変です。毎年思うのですが、4月が来る前に準備をしておけば楽になるはずなのに、なかなか思うようには進みません。結局、4月になるといつも通りバタバタしてしまい、自転車操業どころか、倒れた自

転車をなんとか引きずって進んでいるような感じです。今は、4月の最終週をなんとか乗り切り、連休までたどり着けるようにと願いながら、日々を過ごしています。

先ほどもお話ししたように、私はコンピュータにデータを処理させる研究をしています。そのため、情報関連の授業が多く、自然と情報メディア館（ローム記念館の隣）にすることが多くなります。特に2講時の授業は、私にとってちょっとした試練です。なぜなら、ローム記念館の1階にはパン屋があって、授業が進むにつれて、ベーカリーから昼に向けた焼き立てパンの香りが漂ってくるんです。これがもう、たまらなく良い匂いで・・・!だんだんお腹が鳴りそうになるのを必死に我慢しながら授業をしています。4月の2講時は、私にとって「空腹との戦い」の時間でもあります。

2005年4月25日、その日は月曜日でした。もう少し頑張ればゴールデンウィークに入る週で、私は2講時に情報メディア館で授業をしていました。もちろん、いつものようにベーカリーの良い匂いと戦いながら。その授業中、ある学生がやってきて、「友人が事故で大変なことになっているので、様子を見に行きたい。授業を退出させてください。」という申し出がありました。正直、その時は驚きましたし、「授業を抜け出してまで行かないといけない事故って、いったいどんな事故なんだ?」と思ってしまったのです。もちろん、その場では授業の途中ですから、対応できる状況ではありませんでした。

日常を壊す事故や災害は、いつも私たちの想像を超えて突然やってきます。JR福知山線の脱線事故のことを知ったのは、2講時が終わったお昼の時間でした。正直、事故の詳細をどのように知ったのか、その時の記憶はあまりはっきりしていません。

その日、兵庫県尼崎市で起きた事故は、JR学研都市線同志社前行きの7両編成の列車がカーブでスピードを出し過ぎ、曲がり切れずに脱線し、先頭の2両が線路脇のマンションに激突してしまいました。列車は原形をとどめないほど大破し、その結果、107名が死亡し、500名以上が負傷するという大惨事になりました。この事故で、同志社大学の学生も3名が亡くなり、20名以上が負傷しました。事故のことを心配していたあの学生の申し出に応じられなかったことを、私は深く悔やんでいます。今でも、その瞬間のことを思い出すたびに胸が痛みます。

事故や災害はいつも突然に想像を超えてやってきます。2011年3月11日の東日本大震災の時もそうでした。そして、私は次の2つのことに対して自然に祈らざるをえません。

まず、一つ目の祈りです。

普通に生活していた方々が、突然の事故で命を落とされたり、負傷して日常を失ってしまったことへのお悔やみの祈りです。当時、事故の列車はJR京田辺駅で車両が切り離されるため、同志社の学生たちは前方4両の車両に乗っており、多くの学生が被害に遭いました。また、事故が起こったのは午前9時過ぎ、ちょうど学生たちが2講時に向けて京田辺キャンパスに向かっていた時間でした。普通に大学に通い、普通に勉強し、友達と笑い合い、時には恋愛を楽しむ・・・そんな当たり前の日常が、ある日突然奪われた方々の悲しみや無念さを、すべて理解することは到底できません。しかし、その方々に対して、共に祈りを捧げさせていただければと思っています。この祈りは、同じ月に福島県の磐越自動車道で事故に遭い、命を落とされた同志社の学生に対しても同じ思いで捧げます。

次に二つ目の祈りです。

それは、何気なく過ごしている「いつもの日常」に対する感謝の祈りです。朝目覚め、普通に一日が過ぎ、夜には眠り、また次の日も起きることができる。そして、こうして皆さんの前でお話できること。これらは当たり前のことのように思えますが、この「普通の日常」は、実は大きな奇跡の積み重ねなのです。私たちが気づかないところで、想像を超えるような出来事が起きていないからこそ得られる、かけがえのない日常です。この大切な日常に対して、心から感謝したいと思います。そして、明日もまた、同じように穏やかに普通の日常が続くように、祈りたいと思います。

今、世界のあちこちで紛争が続いています。ウクライナでは戦争が終わらず、パレスチナのガザの状況は悪化の一途をたどっています。ミャンマーやスーダンでも紛争が続き、多くの人々が苦しんでいます。そして、広島・長崎に落とされた原爆による苦しみも、いまだに終わっていません。

普通の日常が戻るように、今すぐに効果的な対策を取ることは、私にはできません。しかし、祈ることならできます。祈りしかできないかもしれませんが、その祈りをささげさせていただければと、心から願っています。

最後になりましたが、2023年度、在籍していた7名の学生が亡くなりました。志半ばで亡くなられた学生や教職員の方々、そして突然日常を奪われた全ての方々のことを偲び、その方々に思いを馳せながら、祈りを捧げたいと思います。

4月から学長に就任された小原克博学長は、同志社大学の未来像として「同志社ルネサンス」というビジョンを掲げています。このビジョンは、同志社らしい輝きを持った未来を描いています。とても輝かしい未来の姿です。しかし、その未来を達成するためには、これまで苦勞されてきた先輩達の歩みを忘れないこと、そして志半ばで日常を失ってしまった方々の思いを胸に刻むことが大切だと思います。私たちは、そうした過去の教訓を糧に、明るい未来に向かって進んでいく必要があるのです。

本日はお時間をいただき、ありがとうございました。てみる。そうした機会を持っていただけたらと思います。

2024年4月24日 京田辺水曜ランチタイム・チャペル・アワー
「逝去者追悼礼拝奨励」記録